

文化遺産としての軍事遺構

——横須賀市における軍事遺構の「文化遺産化」を中心に——

東京都市大学非常勤講師 塚田修一

1 目的

本報告の目的は、神奈川県横須賀市において起こっている、軍事遺構の「文化遺産化」と呼ぶべき現象の検討を通して、「文化遺産」の現在的な有り様を把握し、またその社会的条件や背景について考察することである。

周知のように、1884年に鎮守府が設立されて以来、敗戦に至るまで、横須賀市は海軍の主要な軍事拠点として機能してきた「軍都」である。そのため、現在も戦時中に使用されていた軍事遺構が、(米軍基地内も含めて)横須賀市内の各地に点在している。

現在、そのような軍事遺構を、「文化遺産」として運用しようとする動きが起こっており、また実際に運用されている。例えば、東京湾要塞であった猿島の砲台跡や、走水の低砲台跡を巡るガイドツアーが実施されており、人気を集めている。また2016年には、横須賀市は、他の鎮守府であった都市とともに、「日本遺産」(「鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴～日本近代化の躍動を体感できるまち～」)として登録されている。

2 方法

こうした横須賀における軍事遺構の「文化遺産化」と呼ぶべき現象にアプローチするため、報告者はこれまで、敗戦から現在に至るまでの横須賀の表象と地域社会の関係性の戦後史を辿る、「通時的」な調査を行ってきた(塚田2014)と同時に、走水低砲台及び猿島を巡るガイドツアーや、米軍基地内の施設を巡る、「日米親善ベースツアー」に実際に参加するなど、「共時的(現在的)」なフィールド調査を行っている。

この二方向の調査を接続させることで、横須賀における軍事遺構の「文化遺産化」現象を立体的に把握していく。

3 結果・結論

さらに、「文化遺産」についての社会的考察の嚆矢である荻野編(2002)、および、横須賀と同様に鎮守府が存在した軍都である佐世保における「近代化遺産」を検討した山本(2013)や、長崎・軍艦島について、「産業遺産」として検討した木村(2014)といった先行研究の知見を参照・比較しながら、横須賀における「軍事遺構の文化遺産化」という現象の現在的有り様を把握し、またその社会的条件や背景について考察していく。

文献

荻野昌弘編、2002、『文化遺産の社会学』新曜社。

木村至聖、2014、『産業遺産の記憶と表象』京都大学学術出版会。

塚田修一、2014、「横須賀の表象と「占領の記憶」－YOKOSUKA・ヨコスカ・よこすか－」『年報カルチュラル・スタディーズ』Vol.2

山本理佳、2013、『「近代化遺産」にみる国家と地域の関係性』古今書院。